

平成 14 年 11 月「広報ようかいちば」

市史こぼれ話 「脱走塚を守る」 匝瑳市八日市場・社会教育課

歴史的遺跡や遺物は、それらの持つ意義や価値観を知ったり、感じたりする人たちによって保護され、守り継がれています。今回紹介する市指定史跡「脱走塚」も地域の人たちによって、その由緒にふさわしいかたちで守り伝えられているといえましょう。

脱走塚は、1868 年（明治元年）11 月 19 日（当時の歴・旧歴では 10 月 6 日）の松山戦争で戦死した水戸藩士を地元松山村、中台村の人たちによって埋葬した墓地のことをいいます。

水戸藩内部抗争の最終戦がこの地を舞台にくり広げられ、多くの被害や恐怖を周辺村むらにも及ぼしました。戦後処理は、中台・松山両村の人びとに課せられました。

新政府は、同年 9 月に元号を慶応から明治と改めましたが、まだ藩は残り、近くの多古藩（多古町）にその処理を命じ、遺体の埋葬などは両村の村役人などが行き、その翌年に「戦死二十五人の墓」が建てられ、両村によって供養されたと考えられます。記録をたどると、1889 年（明治 22 年 5 月 26 日）松山戦争の戦死者の 21 回忌法要が、福岡町（のちに八日市場町）の見徳寺、福善寺住職によって営まれ、群衆の者に紅白のもちを投げ「広き古戦場（脱走塚）も当日は非常のにぎわいにてありし」と、当時の新聞で報じられました。

次いで、1926 年（大正 15 年）に当時の朝日新聞記者であった水戸藩・諸生党の子孫、朝比奈知泉（あさひなちせん）らによって脱走塚に供養碑が建てられました。この供養には、水戸藩士の子孫も加わったようで、当時のことがくわしくわからないのが残念です。この碑文の中で、中台村大木三右衛門、山崎八郎兵衛、中台仁右衛門、松山村下山九兵衛、古関佐兵衛、関忠兵衛、らによって、遺体が埋葬されたとあります。

そして、昭和 41 年 10 月に、水戸市（茨城県）と本市（八日市場市・現匝瑳市）とで松山戦争百年祭が催されました。

脱走塚を守り伝えるという当地域の人たちの心情は、「年月を経ても供花や線香が絶えない」と大正期の碑文に見られるように大木九郎（故人）さん、現在では大木正男さんご夫妻によって受け継がれています。平成 20 年 7 月現在は大木芳子さんが夫の遺志を継いで脱走塚墓所を守り供養されております。

供養の経過 まとめ

- 明治元年 水戸藩諸生派藩士戦死、諸生派壊滅する
- 明治 2 年 25 人戦死の墓 地元有志による建墓
- 明治 22 年 21 回忌法要、見徳寺、福善寺により法要
- 大正 15 年 弔英魂碑 除幕式、朝比奈知泉ら子孫、地元有志により建碑
- 昭和 41 年 百年祭、八日市場市と水戸市の主催により百年祭を挙げる、水戸の梅植樹する
- 平成 20 年 140 年忌慰霊祭、水戸殉難者恩光碑保存会「慰霊祭実行委員会」主催により、水戸藩国事殉難者慰霊祭を挙げる、銘木・水戸の梅を植樹する



明治 2 年 5 月 戦死 25 人の墓



大正 15 年 11 月 10 日
弔英魂碑 朝比奈知泉 撰文



昭和 41 年 10 月 14 日 建碑
水戸藩国事殉難者百年祭記念
松山戦争「八日市場の戦い」

匠瑳市田久保、蓮光院境内の片隅に松山戦争、落武者の首塚がひっそりと眠っておった。墓上の石碑には、(梵連山道快信士) 左側面には明治元年戊辰 10 月 6 日「現在は 11 月 19 日」の文字が刻まれる。此の 10 月 6 日が松山戦争の当日で、大きな証しとなります。そして奇遇と思えることは、弘化 2 年「152 年前」建立の(延生地蔵)に一步下がって並んでおった。さぞや、地蔵に手を取られ一人霊界に導かれることであろうと思われる。そして、どなたが手向けたか、一輪の花に胸をうたれた。

戦いに敗れ敗走した諸生派の落武者は千葉方面をめざしたであろう。脱走塚を逃れ富岡を過ぎ飯の森にさしかかった時、戦闘で深手を負った 3 名は息絶える。友の死を見て思案にくれるが、追手は迫って来る。そこで、友の首を「勿ねて」逃げて来た。2 名は飯倉小学校となりの「不動院へ」(今状は集会所となり寺の面影は無く、石塔が若干散乱しておる、歴史は風化する。) 千葉を目指す敗走者は、友の首を持ち、逃れて来たが、重い首を持っては逃げきれぬと考えた。そこで、田久保集落まで来た時、村の竹やぶの中へ置いて逃れて行く。それを村人が見ておった。

「なぜ蓮光院に首塚」があるかと考えて見ると、(松山戦争の敗者諸生派が西を目指して落ち延びて行く時に、田久保集落まで来て寺の下の竹やぶへ首を置いて行くと村人は語る。

此の日の松山戦争は当地方では、鉄砲音が激しく又駆け足で逃れて行く音を聞く) と古老が語っておった。

「墓地について特筆すべき事」

一般的に考えられるのは、氏素性の分らぬ者は無縁仏として葬られ、墓印として小石や小枝を一個置く程度である。僧侶に依頼して「戒名をもらい祈祷して、石碑を建て供養をした」。立派なことでした。此の石塔の台座に有る氏名が施主であろう。台座の氏名を調べると、田久保、新村、木積、富岡の数名が読める。さぞや、若年で無縁仏となったとはいえ、靈魂も地下にて、さぞや安らかに永眠しておることでしょう。

特に、本日は、140 年間一人で淋しかった想いが、古里の知人や、関係者が尋ねて来て供養して下されるので安眠して下され、歴史の表面、世に出ることが出来ます。此の件に関しては私の悲願でした。有難うございます。 合掌 (平成 20 年 5 月 記)



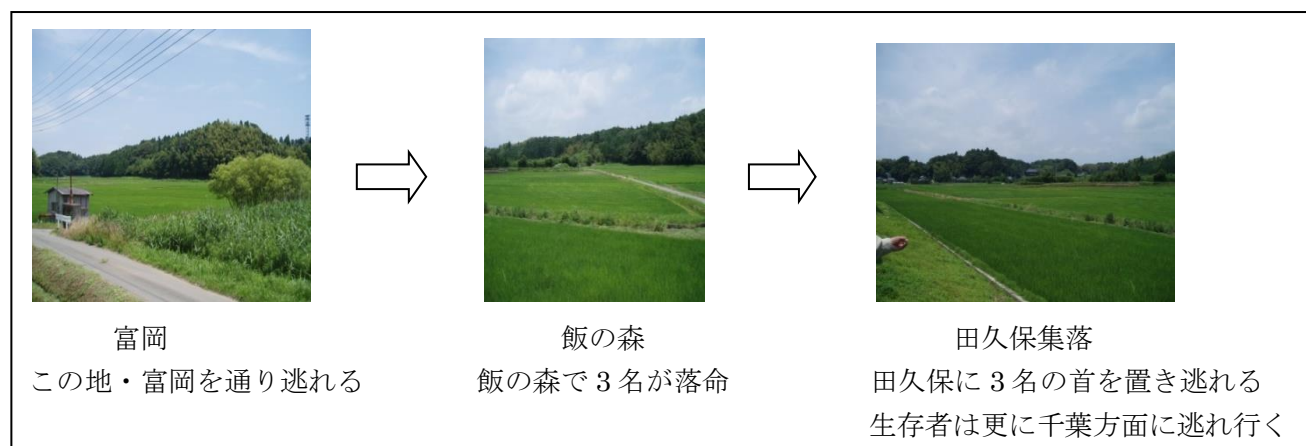
匠瑳市田久保区・蓮光院境内	
加瀬俊雄氏	右側
落ち武者の墓碑	中央
延生地蔵碑	左側「屋根の下」

平成 20 年 10 月 6 日水戸藩国事殉難者慰霊祭にあたり、田久保区・蓮光院にあったこの墓を水戸藩国事殉難者埋葬地「脱走塚墓所」に移転・改葬して、多くの戦死者と共に供養することになりました。

両軍戦闘の地「松山村・中台村」

松山・中台台地・→富岡→飯の森→田久保集落

戦場を逃れこの森を通り田久保へ



「斬られ様」について 寄稿文 匠瑛市 南波鹿子様 記

ご協力 匠瑛市 大川秋嘉様、今泉 林静様

明治元年会津城が落ち、奥羽地方も鎮定し、水戸藩から加勢に行った市川三左衛門、朝比奈弥太郎引率の佐幕党員百余名は、藩のために尽くしたという誇らしい気持ちで帰藩した。所が水戸藩は勤皇党に変わっていて、歓迎されるどころか追い出されてしまった。仕方なく利根川を下り、浜伝えに八日市場方面に上った。現国保病院東北に着くや追って来た勤皇党と戦争となり朝比奈以下 25 名戦死し、中台に葬られ脱走塚と称す。残党は刀傷を負い乍ら野手方面に下り、現野栄町役場東側に待ち伏せ勤皇党と戦争、14 名戦死、尚も、市川三左衛門以下の残党は、光町方面へと逃げのび、それぞれ変装し何処かへ落ちたという。置き去られた屍は、今泉地区の人々に厚く葬られ現野栄町東側に「斬られ様」と称され、碑も建てられた。参詣人も多かったという。勤皇党佐幕党の戦争跡である。今から 128 年前の明治夜明け前のでき事であった。平成 8 年 南波鹿子 紀

南波様より聞き書・加瀬俊雄様 記

平成 20 年 7 月 10 日先生 曰く、私は 80 歳、生家は野手旧村大根畑、父石橋緒右衛門、旧学校教師 現在茶道の師として生徒と共に楽しむ。

- ① 松山戦争にて諸生派敗れ敗走者は野手村に逃れて来て、民家に一夜泊り、数名はそのまま西を目指し逃れ、「衣服を貰い受け平服に着替えて逃れ行く。代替えに刀剣を置き残したと言われる。残った数名が追って来た天狗派に首を打ち取られる。
- ② 「斬られ様」と称され、地元では石碑を建て供養した。
- ③ 水戸藩士松山戦争脱走塚百年慰霊祭にも、この場所へ来て供養すると語る。
- ④ 此の記について南波先生は、郷土史の研究に熱心でいろいろの人々の聞き学や、書物記録を調べ、現場に足を運んで書したと語る。

建碑の場所は、現状は昭和 40 年代に土地改良耕地整理により田畑の姿が変わり、現状では、当時の面影はなく、場所の特定はできません。現在は此の辺の土地を「きられさま」という小字「こあざ」のように呼んでいる。ここに諸生派 13 名が戦死・葬られている。歴史は風化すると言う言葉が現実になる。

匝瑳市安養寺に埋葬された水戸藩・大番頭・鈴木欽一郎の墓について、

明治元年10月6日に、「松山戦争」と言われる水戸藩諸生派と水戸藩天狗党の決戦が八日市場松山台で展開されました。その結果、諸生派は大多数が戦死し壊滅しました。戦後、落武者狩りの厳しい中、鈴木欽一郎は戦場を離れて、負傷の身を旅籠・吾妻屋に寄せ潜んでいた。

天狗党は決戦後、10月10日まで八日市場町に滞在し、落武者を捕縛すべく徹底的に搜索していた。又、此の間、八日市場町民に対し金品強要乱暴狼藉等暴虐の限りを尽くしていた。

間もなく、鈴木欽一郎の吾妻屋宿泊は人の知る所となり又天狗党も知る所となり、負傷の身を天狗党に捕縛され、近所にある安養寺に連行され斬られたと言われている。

旅籠吾妻屋の関係者である大木家は先祖が武家の出であり、水戸藩の状況を知るにつれて、水戸市役所を訪問、鈴木欽一郎が水戸藩士で八日市場で戦死された事を確認し、彼の忠誠心、武士道精神に感ずる所があり、永年にわたる諸々の事情に想いを致し、建碑供養を計画中、当主大木茂氏は志半ばにして永眠、その志を引き継いで、夫人大木ヨシ子さんが平成元年に殉難の地である安養寺の境内に石碑を建て、手厚く供養されています。大木家は神葬祭なので、寺院の境内ではあるが「戒名」はつけないで、石碑には俗名を彫り供養されている。**(水戸藩大番頭鈴木欽一郎之墓)**

平成20年10月6日水戸藩諸生派戦死者墓前に於いて匝瑳市の方々、郷里・水戸市の方々が、参列し「水戸藩国事殉難者慰霊祭」が執り行われると聞いています。永い間、1人で淋しかったであろう。古里の関係者が参り慰霊行事が行なわれるので、さぞ鈴木欽一郎命も泉下で喜んでいるであろうと思います。匝瑳市加瀬俊雄様より聞き書き 平成20年7月15日(川上・記)

安養寺にある鈴木欽一郎之墓



墓碑

聞書・松山戦争 語る人・大木緑氏

大木緑氏は、明治 28 年 10 月 20 日生まれ。松山戦争を見聞した世代と歴史を共にした人である。住まいは八日市場市木積（旧匝瑳村）で松山中台の古戦場は間近かの所である。氏は豊栄村村長、八日市場市議会議員を歴任した。

明治元年 10 月頃、天狗派に敗れて江戸へ向かう諸生派は銚子から忍坂（現飯岡町）を下っていた。ここでも両派の間で小競りあいがあつて、戦死者がでていたのです。

諸生派は八日市場へ逃げて来て、福善寺へたてこもりました。あの頃諸生派は百人と言っていました。今となつては、はっきりした人数は分かりません。天狗派の方は、水戸から南へ来るにつれて、博徒が途中から加勢にきて、大変な人数になっていたのです。

その頃、八日市場に、深田長四郎という顔役がおつた。当時は磯長とって、今でも市内で呉服屋をやっている。この深田長四郎が、「福善寺で戦争をやられては困る。どうか立ち退いてくれ」と、町の人々を代表して、福善寺諸生派の所へ出かけて行ったのです。これに対して、市川らは「我々は寺から退却するから路銀を出してくれ」と言ってきた。諸生派は逃げたくても金がなかったのだ。そこで、深田は、自分が百両、町の人々から二百両、合わせ手三百両を出して、ようやく諸生派に立ち退いてもらったのです。かくして、諸生派は山門に火をかけて松山台に退いたのです。

松山台で、追つて来た天狗派は、南に主力を置き、東、北の三方から諸生派を取り囲んでわずかに西だけあけておいた。これはその頃の戦争の常識で、敵を包囲した時には一方を必ずあけて敵の逃げ道を作り、味方の損失を少なくしたのです。戦争は 2 時間位続いた。ここでは朝比奈弥太郎（元執政）一族は、下僕に至るまで全員が死んでいます。彼らは朝比奈弥太郎に日頃から恩義を感じてのことでした。福善寺の住職に聞いてみると逃げきれなかった諸生派が三人いたが追つて来た天狗派のために寺で処刑されてしまった。この事は寺の書き物にも残っている。

戦いに敗れた諸生派は栗山川（松山村の西六キロ）の江戸街道の新井渡しを通過して逃げたそうです。

豊栄村では、逃げきれなかった負傷者三名が死んでいる。この三人とも首がなかった。墓は飯倉（現小学校付近）に二体いっしょに埋められ、30 年頃、私が豊栄の村長時代に、駐在所からの要請で供養したことがある。今でも墓はあるだろう。

木積では、民家にかくれていた二人の諸生派が、二三日やっかいになって、逃げて行った。この人たちの名前はわからない。二人は、自分の持っていた武器を民家に置いて、平服（百姓姿）に変装して逃げた、という話が伝えられている。木積では、戦争が始まって鉄砲の音がするし、福善寺が大火事なので、近くの人々は戦争を見に行つたといひます。この人たちは、逃げて来る諸生派五人に途中で出逢つたそうです。しかし農民に危害を加えず、新井渡しの方へ向かつて行つたそうです。これらの村の人々が、小さい頃の私たちに話を残してくれたのです。

松山台の 25 人の戦死者の首は、八日市場の桐屋旅館に本陣を置いていた尼子扇太郎（追討軍々将）の所へ送られました。そして本陣の前に並べられたそうです。この首をかついで行つた村の人々は褒美を貰えると思つて運んだそうですが、「おまえたち、ごころう」と言われただけでした。こんな話も残っているのです。

八日市場にいた天狗派には、途中から加わつた不頼の者がいたので多少の被害はあつた。近くの歌に「鐘は筑波の上にある」というのが残っている。つまり、八日市場の寺にあつた鐘をはずして、売り飛ばしていった天狗派のことを唄っているのです。天狗派の持ち去つた鐘は天狗派の発生の地である筑波山に持つて行つたのだろう、という意味なのです。八日市場の天狗派は、ケットウという赤色の毛布を着用している者が多かつた。また地元には諸生派の死骸から金を奪つて裕福になつた人もいつたといわれている。三百両の金を分けて、持つたままの諸生派もいたのですから、そういうこともあつたかもしれない。

脱走塚はもとは簡単なものだった。旧道はもっとせまかつたが、今のは改葬して広くしたものです。墓石の前に 25 穴あいたものがありますが、これは線香を立てる穴ではありません。村の人々が諸生派を供養して秋葉の実を上げたのです。秋葉の身は鉄砲玉の形をしています。お前らが負けたのは、鉄砲玉が無かつたからだ。かわいそうに、という意味が込められているのです。おそらく、松山戦争を見聞した人から話を伝え聞いているのは、もう私一人になっているでしょう。（昭和 55 年 6 月 15 日談）